

International Cooperation Center for
Agricultural Education, Nagoya University

ICCAE



news
No.8 2003.10.1

名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成15年10月1日発行 第4巻 第1・2合併号(年2回発行;通巻7号)

発行/名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL 052-789-4225(受付) FAX 052-789-4222

<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~iccae/index.html>

e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

アフリカ食糧増産プログラム 「SG2000プログラム」の評価 研究

プロジェクト開発領域 松本 哲男

笹川アフリカ協会からの委託により1986年以来アフリカ10ヶ国で行われている小規模農民の食糧増産をめざすプログラムSG 2000(笹川アフリカ協会とカーターセンターの合同事業)を外部評価するため、2001年9月ガーナ、2002年マラウィ、モザンビーク、ウガンダ、ナイジェリア、エチオピア、マリ、ブルキナファソ、ギニアを各々2週間訪問し、現地調査

を行った。調査は、①プロジェクトは対象国の食糧増産技術の普及と増産に貢献しているか。②対象国政府の農業政策は小規模農業の生産性向上を重視し、プロジェクト終了後も政府の組織で活動を継続できる体制づくりをしているか。③目標達成のため、進行中のプログラムを修正する必要があるか。④進行中のプロジェクトで、終了することを勧告する国はあるか、を目的に行った。

評価チームはICCAEから松本教授、海外から一名と日本国内から一名、の計3名で構成した。ICCAE以外の評価委員は評価国により異なった。現地では、圃場、農民、農民組合、村、研究所、農業研究者、大学研究者、女性団体、普及員を含む政府関係者、政府要人、ルーラルバンクや種子生産組合、生産販売関係者を含む公私の農業関係者・機関を訪問し、SG 2000プログラムの活動に関する情報収集と意見交換を行った。SG 2000関係の印刷物、書類、政府刊行物を調査した。ガーナではSG 2000に参加経験のある農家にアンケート調査を行った。

SG 2000の特徴の第1は、組織形態にあった。SG 2000スタッフは カントリー・ディレクターの下、運転手を含め10名前後の人数で、各国農業省農業普及局と協力して、というより事実上、普及局をSG 2000の手足のように使って普及活動を行っていた。そのため、費用対効果が著しく高かった。このような組織形態が取れるのは、ノーマン・ボーログ笹川アフリカ協会会長とジミー・カーターのリーダー・シップによるところが大きい。第2の特徴は、普及技術にあった。SG 2000は10種類の主要作物に関し



収穫トウモロコシの貯蔵庫への収納作業
ガーナ、エジュラ村



アサワ女性センター会員によるパームオイル压榨作業
ガーナ、エイサム村

て技術普及パッケージを作成していたが、これらの技術は外部から持ち込んだものではなく、もともと各国の研究機関に存在していたが、予算や機動力がなく、研究成果が生産現場の農村へ行き渡っていなかったものを、農民に絵や文章でわかりやすく説明したものである。技術パッケージの特徴は、改良品種種子の導入、播種間隔の適正化、播種量の一定化（一株2本立て）、化学（堆肥）肥料の投入と収穫したトウモロコシの風通しの良い細幅貯蔵庫での貯蔵推進にあった。第3の特徴は農民参加による実践規模の生産試験プロットの設定だった。世界銀行を含めた通常の試験区は数平方メートルであるが、SG 2000ではプログラムに参加する農民自身の畑、0.4haと実際の農地に匹敵する面積を使い、改良技術の成果を収穫袋の数の増加として得られる経済効果を実感させることができた。第4はSG 2000はプログラム参加農民に、種子・肥料・農薬を有償で提供し、収穫後、現金か収穫物で費用を返還してもらい、農民の自立を促していた。

各国における技術普及の進展度は、カウンターパートである政府・農業省の熱意に大きく左右されていた。ガーナでは国民1,840万人の65%が農民で、GDP78億ドルの36%を農業関係が占めるにもかかわらず、政府予算に占める農業関係の支出は1991年3%、1995年2.3%、2000年1.9%と年々低下していた。政府が農業を重視しているとは到底言えない状態であった。ガーナ政府は、農業分野に最低20%は支出すべきである。政府がオーナーシップをとる意気込み

があるかどうかプログラム成功のかぎである。

SG 2000の特異性として以下のような点が上げられる。SG 2000は①アフリカにおいて近代的農業技術を効果的に移転している唯一のNGOである。②カウンターパートに技術のオーナーシップを移す。③政府と共同で開発計画を作成する。④政府とともにあるいはその下で活動する。⑤カントリー・ディレクターが担当国の実情を考え、決定する。⑥ファシリテーターである。⑦農民と普及員、研究者を結びつける。⑧人的資源開発における能力向上のために農民と同様、普及員も訓練する。⑨農民が抱えている問題を明らかにし、解決する。⑩新しい技術など機会に積極的である。⑪テスト・プロットが実践的である、といえる。アフリカにおける国際機関による食糧増産支援事業はことごとく失敗したと言われている。SG2000はその中で着実に成果を上げている理由がこれらの特異性にあると考えられる。



良蛋白トウモロコシを幼児に給食する「生活向上女性グループ」
ガーナ、エジュラ村

名古屋大学農学国際教育協力研究センター 第5回オープンフォーラム 「インドシナ半島における農業・高等教育」

日時

2003年12月18日(木) 13:00～18:00 12月19日(金) 10:00～16:00

会場

豊田講堂第一会議室

講演者

金森秀行 国際協力機構(JICA)、
元名古屋大学農学国際教育協力研究センター
鈴木俊 東京農業大学
渡辺研 東京農工大学農学部
縄田栄治 京都大学大学院農学研究科
緒方一夫 九州大学熱帯農業研究センター

小山内優 政策研究大学院大学
宮田悟 国際農林水産業研究センター
(JIRCAS)国際情報部
松本勝男 国際協力銀行(JBIC)
半谷良三 国際協力機構(JICA)